

# クロスアポイントメント制度による活動報告

—大阪公立大学建築学科倉方研究室との合同ゼミと研究交流の経過—

## Report on activities using a cross-appointment system

Joint workshops and research exchange between laboratories at two different universities

黒田 智子 武庫川女子大学 教授

Tomoko Kuroda Professor,  
Mukogawa Women's University

### 概要

大阪公立大学（当時は大阪市立大学）大学院工学研究科および工学部と武庫川女子大学大学院及び全学部との間において、2019年、教育・研究に関する協定が結ばれた。それを契機に公立大学から本学にクロスアポイントメントの要請があり、2020年度から、工学部建築学科倉方俊輔教授と武庫川女子大学生活環境学科黒田智子（筆者）との研究室間で、卒業研究のための合同ゼミが開始した。今年度（2022年度）で3年目を迎える。初年度の2020年度はコロナ禍の一年目でもあり、合同ゼミは遠隔で月1回、各研究室の所属学生が交代で成果を発表し、有意義な交流が実現したと思う。

2年目の2021年9月、倉方先生が教授に昇進され、建築学科の歴史・意匠講座に変化があった。その11月、本学生活美学研究所において筆者が主宰する甲子プロジェクト研究会で、伊東忠太についてのご講演をお願いし、合同ゼミとは別に研究交流も始まった。伊東忠太は、甲子園ホテル（現・甲子園会館）の設計者遠藤新の東京帝国大学時代の恩師である。3年目の今年度（2022年度）、研究所の嘱託研究員をお願いし、伊東から遠藤への影響について共同研究を開始することになった。特に今年度は、大阪市立大学が、大阪府立大学と合併し大阪公立大学となった年でもある。このような変化の中で、2年間の教育・研究の交流について振り返る。

### 1. 経緯

2019年の後期が終わるころ、教育研究社会連携推進室の大坪明室長から連絡があった。大阪公立大学（当時は大阪市立大学）建築学科とのクロスアポイントメントによる交流についての打診であった。大坪室長は、長年、生活環境学科で教授として教育・研究に携われ、ご専門は、都市住宅の計画・政策である。毎年度、本誌にも継続的に論文を寄稿されている。当時、大坪研究室では、UR等が所有する集合住宅団地の空き家を借用して、居住者（を想定した学生）が自主改修するストック活用に関する実証実験を重ねていた。この実験は、他大学にも呼び掛けておこなわれ、特に、大阪市立大学横山俊祐教授の研究室との連携で2007年武庫川団地、2008年UR浜甲子園団地、2010年UR中宮第一団地での実験が実施された。この実験は、学生に人気高く、新聞に取り上げられることも度々であった。筆者は同じ学科の教員として、学生たちが熱心に参加する様子に間近に接していたのである。

さて、クロスアポイントメントは、大阪公立大学（旧・大阪市立大学）大学院工学研究科および工学部と武庫川女子大

学大学院及び全学部との間において、2019年6月7日、教育・研究に関する協定が結ばれたことを契機としている。その背景には、前述のような両大学における建築計画系の共同研究が懸け橋となっていた。一方、大坪室長のお声がけは筆者にとって大変ありがたいと同時に不安もあった。筆者の専門は、歴史・意匠分野における建築論であるため、大坪室長が築かれたご実績を引き継ぐことが可能なかとの懸念からである。なお、すでに生活環境学科では、北村薫子教授が、大阪大学とのクロスアポイントメントによりご専門の環境工学の分野で教育・研究の交流に取り組みされておられた<sup>2)</sup>。

筆者の不安をお伝えすると、大坪室長は、早速、市立大学建築学科歴史・意匠講座の倉方俊輔先生を引き合わせてくださった。初対面であったが、アクティブに研究室を組織されておられることがお話の端々に伺えた。ご専門の近代建築史についてのご研鑽を踏まえ、一般の方々に建築の魅力や価値をつたえることにご尽力され、『東京モダン建築散歩』、『吉阪隆正とル・コルビュジェ』、そして2021年には、『京都 近現代建築ものがたり』を出版された。日本最大の建築公開イベント「イケフェス大阪」の実行委員も務めておられる。生活環境学科は、計画系に比べて歴史・意匠系の教員が相対的に少ない。両研究室の交流は、筆者はもとより、学生にとって非常に有意義だと思われ、お引き受けすることにした。

### 2. 前提

#### 2-1 学科の専門分野・体制の違い

大阪公立大学と武庫川女子大学は、共学か女子大か以外にも基本的な違いがある。公立大学建築学科は講座制をとり、歴史・意匠講座では、建築家と建築史研究者を両方擁する。交流が開始した2020年度は、宮本佳明先生が教授、倉方俊輔先生が准教授としてそれぞれ設計と歴史をご担当だった。一方、生活環境学科は、このような講座制をとっていない。

また、公立大学建築学科の学生は、卒業研究と卒業設計との両方に取り組む。つまり倉方研究室では、設計も論文も、ともに建築家と建築史研究者の指導を受けるのである。生活環境学科では、基本的に所属研究室の教員が学生を指導し、卒業研究として、学生は論文または制作のいずれかを選択する。

さらに、公立大学建築学科は工学部の中にあるが、生活環境学部生活環境学科は、家政学部被服学科をもとに拡充した。したがって、両学科は、そもそもカリキュラムの成り立ちが異なる。また、公立大学建築学科は大学院への進学率が高いが、生活環境学科では、ほとんどの学生が卒業後は就職する。

キーワード：卒業研究、コロナ禍、遠隔、合同ゼミ、歴史的観点

## 2-2 卒業論文のテーマ・提出・発表方法の違い

大阪公立大学建築学科には、専門分野として計画・構法、デザイン・歴史、環境工学、構造力学、防災などがあり、それぞれ研究室をもつ。卒業論文のテーマは、そのような「建築学」の範囲の中にある。倉方研究室は、デザイン・歴史の分野にあるので、学生のテーマもその中で選択されている。一方、前述のように本学生活環境学科は、「衣」から「住」まで、母体である被服学科から学びの分野を拡げた。その内容を見やすくするために、2019年度より、被服学、アパレル、生活デザイン、環境デザイン、建築デザイン、まちづくりの6コースを有している。従来筆者の研究室では、インテリアやプロダクトを扱う生活デザインコースと住宅を中心とする建築デザインコースの学生が概ね半々であった。また、論文よりも制作を選択する学生が多い。これは、生活環境学科全般の傾向である。

公立大学では、論文を、12月、設計を2月に提出、発表会は、論文と設計ともに2月である。本学科では、論文・設計の提出が12月下旬、全員が1月上旬に要旨集に掲載のため要旨を提出、2月上旬に発表会、その前後に作品展が開催される。そんなスケジュールに沿い、卒業研究の発表方法も違う。公立大学建築学科の4年生の総数は30名で、卒業論文は全学生が全教員のもと同じ会場で発表をおこなう。一方、卒業設計については、優秀作品を5,6点選出して講評会を開催、その中から最優秀作品を決める。筆者は、2020年度、対面・遠隔のハイブリッド形式による卒業設計の講評会に参加した。先生方の白熱する講評と共に、大学院生を中心とした会場設営が新鮮であった。

本学生活環境学科の場合、卒業研究展に180名全員が参加、論文・制作ともポスターを作成し作品と共に展示する。さらに卒業研究発表会において、全員が2日間で発表をおこなう。分野ごとのセッションに分かれるので、全ての発表を聴講できるわけではない。また、優秀論文・作品は、本誌『生活環境学研究』または、『生活環境学科作品集』に掲載される。

以上のような違いを前提に、コロナ禍1年目の2020年度は、Zoomによるオンライン形式で合同ゼミが開始した。筆者の研究室の学生には、明石・姫路からの通学もあり、住吉区杉本町に集結となると往復で5、6時間くらいかかってしまう。公立大学の学生が本学に来学する場合も考え合わせ、オンライン開催は参加し易さにメリットがある。

## 3. 倉方研究室の卒業研究

倉方研究室の所属学生は、前述の講座体制で論文と設計の両方が鍛えられる。倉方先生ご自身、新進気鋭の建築家の動向についても詳しい。そんな講座としての特徴が、卒論のテーマ選択においても発揮されていると感じた。表1は、倉方研究室の2020、2021年度の卒業論文と卒業制作のテーマ、表2は研究室所属学生の構成である。合同ゼミには、大学院生も参加、経験を踏まえた的確な質問やアドバイスをしてくれる。年齢の近い大学院生からのコメントは、筆者の研究室の学生にとっても大きな影響力があったと思っている。また、このような関係が日常にあることは、当然、学びの充実をもたらすと思う。

さて、公立大学建築学科の学生気質は、何よりもまず、大変「まじめ」であるという。確かに合同ゼミにおいては、共通して真摯な情報収集とそれを精緻にまとめ上げる姿勢が見られた。中々テーマが定まらなくても、最終的には、論文と設計と両方をしっかり完成させている。合同ゼミでは論文の経過発表が主だが、筆者の研究室では制作に取り組む学生が多いことがあってだと思いが、ときどき設計についての経過報告もあった。論文については、4月段階では、身近な関心からテーマ設定をしているのだが、やがてテーマと資料選択・収集との間で模索の時期に入る。最終的には、それらの間を埋めて、論文として見事に着地する。短期間の集中力と着実な成果とに感心した。これは、先生方の指導面のご苦労あつてのことだと思いが、手を抜かず段階ごとに真摯に力を尽くす中に、テーマと資料と分析方法という3者の関係を見つけ、自分なりに納得して取り組んでいる。

例えば、松山勇貴さんの「相撲空間の変遷から見る両国国技館の位置づけ」は、大好きな相撲を対象にしているのだが、明治期に描かれた絵図などの資料を楽しんで読み解いている。主観的に選んだ「相撲」という対象についてつぶさに観察してそこに客観的傾向を読み取ろうとしている。生活環境学科には、毎年、大好きなアイドルに関する研究があるが、このような主観と客観の関係を満たす事例を挙げるのは案外難しい。「大好き」を掘り下げるのに大変示唆的だと感じた。

表2 大阪市立大学建築学科倉方研究室の所属学生の構成

	学部4年	修士課程1年	修士課程2年
2020年度	6	1	?
2021年度	6	6	7

表1 大阪市立大学建築学科倉方研究室の卒業論文および卒業設計

2020年度	卒業論文テーマ	卒業設計テーマ
池 美優	明治期から昭和戦前期における消防署の歴史の変遷	大阪市立美術館のリノベーション
竹田 裕幸	建築雑誌における集合住宅の取り上げられ方の変容～「新建築」・「建築文化」の分析を通じて～	大阪駅のプロムナードの設計
中嶋 太一郎	篠原一男住宅作品における設計の主題と象徴的な空間の関係～写真を用いた空間構成の考察から～	臨海住宅地再編計画
林 敬哉	新聞紙上における建築家の取り上げられ方の変容～近現代の朝日新聞記事の分析を通じて～	祖父が住む団地を未来まで継承させる設計
松山 勇貴	相撲空間の変遷からみる旧両国国技館の位置付け	土木構築物のコンバージョン
吉田 悠真	昭和期を中心とした民間集合住宅の実態と認識に関する研究	墓地と墓所の複合施設
2021年度	卒業論文テーマ	卒業設計テーマ
則岡 里空	高度経済成長期における堀江地区の材木商と都市の相互的影響	工場廃墟から集合住宅へのコンバージョン
細谷 健人	言説にみる福岡市のル・コルビュジエ解釈と展開	農と共生する遊歩
堀下 連生	建築家 西川騎の建築活動に関する研究	無住寺のコンバージョン
増田 雄太	日本における20世紀初頭から半ばにかけての「高さ」を求めた建築構想	実家のリノベーション
三浦 一輝	建築的側面からみた1996年世界都市博覧会に関する研究	集合住宅の設計
林 昭澄	建築学会が主催した建築展覧会の全体像及び位置付けと展開	写真用暗室建築の設計



池美優さんの「明治期から昭和前期における消防署の歴史の変遷」は、愛着ある風景から感じられる「大阪らしさ」の分析を起点としている。ひととおり景観を見ることを通じて、やがてビルディングタイプという視点を導入するに至る。最終的に「消防署」という対象に辿り着き、そこから時系列での変遷を読み取り整理するに至っている。

また、中島太一郎さんの「篠原一男住宅作品における設計の主題と象徴的な空間の関係」は、新建築に発表された篠原の作品を写真を対象に分析している。近年、篠原については、日本建築学会でも若手の研究発表がみられる。小住宅がもつ「象徴性」について明らかにしたいという動機が共通しているように思う。中島さんは、最初、言説、平面図などにより多角的分析を試みていたが、やがて対象を写真に絞る。両者とも最初から同じ方法で分析していたらたどり着けなかった「気づき」にねばり強い努力で到達していると感じた。

さらに、倉方研究室は、中華人民共和国、中華民国、韓国など海外からの留学生を擁する。その関心、問題意識に接することで、自ずと学生の視野が広がると思う。林昭澄さんの「建築学会が主催した建築展覧会の全体像及び位置づけと展開」は、戦前の日本と中華民国の関係に対する問題意識を起点に『建築雑誌』の記事の分析をおこなっている。この研究を通じて、林さん自身の問題意識にも深化と発展があったのではないかと感じた。

また、歴史・意匠講座の研究室を志願しているのだから当たり前だとは思いますが、倉方研究室の学生たちは、「歴史」を重視している。一方、筆者の研究室で、デザインや設計に取り組む場合、歴史的要因へ視線を向けることは敬遠されがちである。制作の場合、自身が選んだ対象が「何であるのか」知るために、今日の「形」とった過程を知るのは基本でもあろう。その点で倉方研究室から有効な示唆を頂いたので後述する。

また、建築論的テーマ設定は、筆者の研究室では稀なので、細谷健人さんの「言説に見る磯崎新のル・コルビュジエ解釈と展開」は、取り組み自体が興味深かったことを付記しておきたい。すべてを尽くせないが、筆者が普段接することのないテーマ設定と真摯な取組みに感銘を受ける場面が多々あった。

2年目の合同ゼミ最終回では、設計の成果が披露された。特に、増田雄太さんの「実家のリノベーション」は、生活者のライフサイクルに基づいたヒューマンスケールによる設計提案であった。倉方先生からは、生活環境学科の発想に接したことが影響していること、建築学科内での評価が高かったことなどを伺っている。今回の研究室間の交流が意外に早く効果を発揮しているのであれば、とてもうれしいことである。

#### 4. 合同ゼミにおける黒田研究室の卒業研究

筆者の研究室は、生活者の視点でヒューマンスケールを大切にしてテーマに取り組む学生が多い。このような特徴もまた、生活環境学科の傾向ではないかと思う。初年度、筆者の研究室は、たまたま全員が生活デザインコースの所属学生であった。したがって、パッケージ、プロダクト、インテリアデザインの分野での制作が多かった。学生たちは、合同ゼミを通じて、歴史調査が重要であると考え始めていた。例えば、松村菜祐さん

の「富（ふう）大阪高槻富田の地酒再興のための日本酒ブランド」は、高槻市に残る日本酒の老舗ブランドについて広く知ってもらい活性化につなげたいというのが動機だった。合同ゼミでのアドヴァイスにより、地域と地酒の歴史を調査したことが、デザインや企画に活かされ、良い経験になったと思う。

生活環境学科の学生は、制作でも論文でも、生まれ育った地域の活性化に取り組むことが多い。筆者の研究室では、地場産業の振興、少子高齢化対策など目標は様々だが、その際に歴史をあまり深く掘り下げないことが気になる。端的に言えば、観光用HPを参照することで満足してしまうことが多い。制作が目的の場合、歴史について掘り下げるのは、無駄とまでは言わないけれども必要があるのか、という疑念が要因かもしれない。一般的とされる情報の範囲を越えようとする傾向があると思う。この姿勢は、文献調査よりも多く実施されるアンケート調査にもみられる。もちろん地域を良くしたという思いは純粹ですばらしい。また、「まじめさ」については、本学科の学生も、学外の方々から高く評価されている。何よりも、問題やテーマに対する感度が良いだけに、「調査とはこんなものだ」と思わずにできるだけ偏見を捨てて取り組んでもらいたいと思う。

さて、研究室ではインテリア空間をトータルデザインとして提案する試みが例年ある。原寸の生活を大切に考えて空間を構想することは、環境をデザインする際欠かせない姿勢だと思う。生活デザインの学生は、小さなモノについて、自己の感性を活かして提案する機会が多い。建築デザインの学生は、インテリアの空間性に至るまでに時間切れとなる。トータルな空間デザインは各コースにスケールの課題がある。

2020年度は、高木唯葵さんの「新しい手紙屋“tomoarigi”の提案」や、坂東いろはさんの「河内木綿の魅力を伝える場の計画」、2021年度は、大路有紀さんの「宝塚大劇場周辺におけるカプセルホテルの提案」が前者に含まれる。その中で、坂東さんの提案は、敷地の実測、河内木綿についてヒアリングなど、エネルギーを惜しまない試みだったと思う。また、瀬戸真鈴さんの「映画館のロビー空間の提案」は、神戸の映画の歴史を調べ、ロビーという場に積極的な意味を与えようとした。このような提案は、ある程度建築模型制作の素養が必要であるが、生活デザインコースのカリキュラムでは十分ではない。その点で、全員生活デザインコースであるにも関わらず、最後まで目標に向かって表現を工夫した姿勢を評価している。合同ゼミの刺激がプラスに働いたと考えている。

2021年度は、生活デザインコース、建築デザインコースがそれぞれ3名と5名だった。この年度は、コロナ禍ながら、実習・演習に対面形式が戻ってきた。それらが遠隔の場合、指導教員と学生の一対一の関係が基本になり、学生間のやり取りが不足しがちである。しかし、学生たちは、合同ゼミで倉方先生や研究室の学生からの意見・質問が何であったのかを相互に確認し、共有することを心がけた。それによって、各提案は、合同ゼミを節目に深化し、提出まで進化を続けたと思う。評価を聞き流さずにしっかり受け止めて、次の提案に活かす姿勢がゼミ全体に定着したと考えている。また、自身のコメントが相手の提案に反映されているのを見る

と、次のコメントは一層具体性が増すように思う。倉方研究室のアドヴァイスは、良い循環を生んでいた。

特に、藤澤綺香さんの「小さな町—少子化における保育施設の提案」、中島玲さんの「丸い居場所—地域の少子高齢化に着目した幼老交流センター」、村上友梨亜さんの「町屋再生—近江商人発祥の地で空き町屋を使ったゲストハウス兼カフェレストランの提案」は、そんな中で、作品としてブラッシュアップされた。残念ながら、これらの提案は、評価されるべき部分を十分にプレゼンテーションしきれていない。それは、学生たちが自分の良いところを自覚していないからかもしれない、今後の大きな課題ではないかと思う。

2021年度は、建築からグラフィックまでスケール横断的トータルデザインの傾向は弱まり、地図や人形など、グラフィックまたはプロダクトの提案があった。橋本沙樹さんの「村野藤吾めぐり—村野藤吾の魅力を見つけるマップ」は、大好きな建築家の作品を体験してもらうことを目的としている。独自の建築巡りを企画してマップに盛り込み、自らの手描きイラストで仕上げている。倉方先生に背中を押していただけて自信によって完成に向かったと思う。また、都築業由さんの「ライフスタイルに合わせた雛人形の飾り方の提案」は、「雛人形を飾るとはどういうことなのか」という問いかけを起点に、飾り方と片付ける箱とを結びつけた。この提案も雛人形の歴史分析が基盤の一つになっている。

筆者の研究室では選択者が少ない論文に関しては、高本莉奈さんの「ライオン通り商店街の現状と今後の展望」を挙げたい。再開発の成功と失敗にはどんな違いと理由があるのか、3年次から事例を調べ考察してきた成果である。一方、思い切った対象の絞り込みは、倉方先生の厳しいコメントに納得したからである。そのために最後まであきらめず、現地調査を実行した。分析が意外と早く終了したのは、調査の目的が明確だったことが大きいと思う。

2021年度は、本誌と学科作品集に4件が掲載、日本インテリア学会近畿支部に2件が発表となったことを付記しておく。

## 5. 今後の展望—むすびに変えて

卒業研究は、社会に出てすぐに役立つことが無くても、人

生の背骨になるような思考や挑戦であってほしいと思う。卒業研究に取り組む時期に、就職活動も始まる。そんな中で定期的な合同ゼミは、一つのリズムをもたらしてくれたと思う。

研究面の交流も2021年度から開始した。11月、本学生生活美学研究所にて筆者が主宰する甲子プロジェクト研究会において建築家で建築史家の伊東忠太（1867-1954）について、倉方先生にご講演をお願いした。

伊東の教え子である遠藤新（1889-1951）は、会心の作・甲子園ホテル（現・甲子園会館、1930）についてあまり記述を残していない。そこで、周辺環境の歴史、当時の文化・信仰など周辺から設計意図を読み解こうと、2016年度に発足したのが甲子プロジェクト研究会である。遠藤は、近代建築の巨匠フランク・ロイド・ライト（1867-1959）のもとで帝国ホテル（1923）の設計に携わる前、学生の手で自分だったらどんな帝国ホテルを設計するかを構想し、卒業論文「都市ホテル設計の解説」（1914）を書き上げた。そこには、すでに、後の「建築論」の萌芽がみられる。また、並行して、卒業設計「都市ホテル」（1914）を提案している。それらには、恩師・伊東のアドヴァイスや資料提供があった可能性が推察される。

近代建築史上、伊東忠太は独自の建築観と作風で知られる。倉方先生は、伊東忠太のご研究で学位を取得され、解説書が出版されておられる。今年度、倉方先生を生活美学研究所嘱託研究員にお迎えし、共同研究に取り組むことになった。教育・研究ともに、展開がとても楽しみである。

## 謝辞

大阪公立大学とのクロスアポイントメントに関わるすべての方々には心より感謝申し上げます。

## 注および参考文献

- 1) 大坪明, 大阪市立大学工学部・工学研究科と武庫川女子大学の連携協定に伴う市立大学建築学科横山研究室との連携活動に関して, 2019.05.22
- 2) 北村薫子, クロスアポイントメントによる大阪大学との併任, 生活環境学研究第9号, 2021, 26-27

表3 武庫川女子大学生活環境学科黒田研究室の卒業研究

年度	クラス番号	名前	タイトル	種別	所属コース
2020	4A16	坂口奈帆	パッケージデザインでの知育菓子ジャンルの拡張	制作	生活デザイン
	4A21	瀬戸真鈴	映画館のロビー空間の提案	制作	生活デザイン
	4A22	高木唯実	新しい手紙屋[tomearigi]の提案	制作	生活デザイン
	4A35	林奈々美	おもちゃが子どもに与えるジェンダー観	論文	生活デザイン
	4A36	坂東いろは	河内本給の魅力伝える場の計画	制作	生活デザイン
	4A42	松村 葉祐	「蜜（ふう）」大阪高槻富田の地産最高のための日本産ブランド	制作	生活デザイン
2021	4A04	大路有紀	宝塚大劇場周辺におけるカプセルホテルの提案	制作	生活デザイン
	4A28	松井実夢	PICK ME—ムードで色どる1dayコスメの提案	制作	生活デザイン
	4A51	都築業由	ライフスタイルに合わせた雛人形の飾り方の提案	制作	生活デザイン
	4C24	橋本沙樹	村野藤吾めぐり—村野藤吾の魅力を見つけるマップ	制作	建築デザイン
	4C30	藤澤綺香	小さな町—少子化における保育施設の提案	制作	建築デザイン
	4C46	高本莉奈	ライオン通り商店街の現状と今後の展望	論文	建築デザイン
	4C48	中島玲	まるい居場所—地域の少子高齢化に着目した幼老交流センター	制作	建築デザイン
	4C53	村上友梨亜	町家再生—近江商人発祥の地で空き町家を使ったゲストハウス兼カフェレストランの提案	制作	建築デザイン